

八角墳の再検討

辰巳 俊輔

I. はじめに

2010（平成22）年、奈良県明日香村に所在する牽牛子塚古墳の発掘調査が実施され、二上山凝灰岩を墳丘全面に施した八角墳であることが判明した。同年には、隣接して新たに発見された越塚御門古墳の存在により、牽牛子塚古墳は『日本書紀』天智四年条との関連が指摘され、大きな話題を呼んだことは記憶に新しいところである。その後、野口王墓古墳における過去の調査成果が公表され、従来から指摘されてきた通り、墳丘全面に牽牛子塚古墳と同様の二上山凝灰岩を施した八角墳であることが再確認されることとなった。

牽牛子塚古墳や野口王墓古墳などの八角墳については、立地や埋葬施設、出土遺物、文献史料などからすでに大王墓との関連が指摘されている。このことから八角墳が大王墓と直接的な関連性が認められるのは当然であり、飛鳥時代の一様相を解明する上でも極めて重要な位置にあることは周知のとおりである。また、近年における発掘調査の増加に伴い、全国的に八角墳の事例が確認されている。これらの成果を踏まえ、各種方面で八角墳に関する研究が行われているが、未だなお課題が山積みとなっているのが現状である。特に全国各地で八角墳の事例が増加するに伴い、その意義についても論及する研究が行われている。そこで本稿ではこれまでの先学諸氏による調査研究を整理したうえで、八角形の思想や被葬者像、さらには年代といったさらなる研究の導入とすべく、八角墳の定義等について再検討を試みる。

II. 調査研究史

江戸時代末期の山陵史家である蒲生君平は『山陵志』において「前方後円墳」という用語を初めて用いたとして広く知られている。この時代に前方後円墳という墳形が認識されていたということは円墳や方墳なども当然知られていたと想像できる。一方、今回取り上げる八角墳については、古墳の墳形に関する記述が現れる江戸時代にはすでに築造当時の姿から大きく変化し、その存在すら長い年月のうちに忘却されていた。以下で述べるように、それから八角墳に関する記述が現れるのは明治時代になってからである。

八角墳の研究は八角形という形状の意義を捉えようとする研究に端を発し、発掘調査の事例増加からその検討対象が畿内だけでなく全国各地に広まっている。さらにはそこから派生して八角墳の被葬者が大王である蓋然性が高いとする研究も発表され、大王墓としての八角墳の位置づけや大王墓としての八角墳とそれ以外の八角墳の差異に関する研究も行われ、様々な視点から考察が試みられている。以下、現在の八角墳研究の現状及び今後の課題について簡略に整理する。

【大王墓の調査】

1880（明治12）年、京都市の高山寺から1235（文暦2）年に明日香村所在の野口王墓古墳が盗掘を受けた際の取調べ調書として作成された『阿不幾乃山陵記』が発見された（田中1906）。この発見を機に、それまで橿原市の五条野丸山古墳が天武・持統天皇⁽¹⁾の檜隈大内陵とされていたのを、野口王墓古墳に治定変えするとともに、中世における野口王墓古墳の実態

が明らかとなった。そこには「件陵形八角、石壇一匝、一町許坎、五重也」と記されており、墳丘が八角を呈し、石壇が一町ほどめぐり、五重つまり五段に築かれていたことが窺える。『阿不幾乃山陵記』が発見されるまでは、様々な文献に絵図とともに記載されていたが、いずれも盗掘による改変が著しいため、八角墳と認めることはできなかった。しかしこの発見により、できる限り築造当初に近い野口王墓古墳の墳丘の様相が明らかになるのに加え、初めて八角墳の存在が確実となった。

発掘調査により八角墳の存在が最初に知られたのは明日香村の中尾山古墳である。この調査では、墳丘全面に川原石が施され、八角形を呈する三段築成の墳丘とそれをめぐる二重の外部施設が検出された（明日香村教委1975）。中尾山古墳は江戸時代よりその立地や埋葬施設の構造などから文武天皇の檜隈安古岡上陵であると指摘されており、この調査によって当該期における大王墓の墳丘として八角墳を採用している蓋然性が高まった。

その後、宮内庁によって天智天皇の山科陵と治定される京都市の御廟野古墳（笠野1987）や舒明天皇の押坂陵と治定されている奈良県桜井市の段ノ塚古墳（笠野1995）の調査が実施され、墳丘表面にそれぞれ花崗岩、榛原石といった石材が施した八角墳であることが判明した。さらに奈良県高取町に所在する東明神古墳の発掘調査では、八角墳の可能性が示唆され、7世紀中頃から8世紀初めにかけての大王墓及びそれに準ずる人々の陵は八角墳として築かれることが指摘されている（河上編1999）。

2010年には牽牛子塚古墳の調査が実施され、墳丘全面に二上山の凝灰岩を施した八角墳であることが判明した（明日香村教委2010）。さらには1959（昭和34）年に野口王墓古墳の発掘調査が実施され、牽牛子塚古墳と同様に凝灰岩を施した八角墳であることを報告した調査資料が情報公開制度により公表され、後に多くの報道機関によりその内容が報告された（柳沢2013）。

2013（平成25）年には牽牛子塚古墳の発掘調査報告書が刊行され、牽牛子塚古墳及び隣接する越塚御門古墳の詳細な情報及び図面や写真、さらには野口王墓古墳の1959（昭和34）年・1961（昭和36）年調査時の写真や図面が掲載された論文、中尾山古墳の再検討も行われ、八角墳に関する研究の材料は以前に増して充実したものとなっている（明日香村教委2013）。また同年には末永雅雄氏らにより1975（昭和50）年に段ノ塚古墳、御廟野古墳、野口王墓古墳の踏査が実施され、その際に作成された墳丘表面の石材の見取り図や墳丘の復元等の考察が掲載された調査概報が公開された（末永他2013）。

これらを受け、2014（平成26）年には陵墓関係の15学協会による野口王墓古墳の立ち入り観察が実施され、墳丘の規格についてなど、具体的な検討が行われた（岸本2014）。

【思想に関する研究】

八角墳の築造背景にある思想の研究は仏教的思想との関連として認識され始めたのが契機である。これは後述するように野口王墓古墳が八角墳であるとする『阿不幾乃山陵記』の記述が研究の基軸となったためである。最近では仏教以外にもいくつかの見解が提示されており、研究はより一層深化している。

藤沢一夫氏は野口王墓古墳を「封土を塔婆的に観念し造営した更なる好例」として取り上げた。それは『阿不幾乃山陵記』に記されている八角五重の姿を前提に、「その形態から塔婆の意味における造営を考えることができる」とし、「塔婆は本来、仏舎利を納蔵した半球状の封土であるが、それが木材、石材、埴材等をもって構成せられるようになると、その材料から四

角の平面形が一般的なものとなり、より町重なものが六角、八角等の平面形態を有すようになる」とした。そして野口王墓古墳の墳丘について「しかるとき八角形のごときを塔婆の本来的平面形態と考えるような錯覚に陥る」と関連づけた。また八角墳について、奈良県生駒市の竹林寺にある行基墓に存在したと想定される卒塔婆について言及し、同時代である飛鳥時代の墳墓も仏教の影響があったと想定した（藤沢1959）。

安井良三氏は前述した『阿不幾山陵記』の記述から、「墳形が仏寺の八角堂を基準」とし、「遺物のなかには光背様の杏葉、台付銅製盒子鏡等の仏教関係遺物にみられるものが多数含まれているので、この古墳（野口王墓古墳）の主は仏葬によったものである」とした（安井1964）。

菅谷文則氏は野口王墓古墳と八角円堂について検討し、「仏教と古墳が直接的関係をもつようになるのは、安井良三氏が指摘されたように、やはり天武天皇大内陵の建立の時点前後に求めるべきであろう」とした。野口王墓古墳については「天皇の遺骸そのものを、仏舎利的に理解していた痕跡がある」とし、そこに「供養堂としての意義を不可・定着された」のが八角堂であると解釈した（菅谷1969）。

井上薫氏は野口王墓古墳の墳丘実測図において、直線箇所が見受けられるとされ、それらを結ぶと八角形か七角形に復元できることから、「封土は円形に近いもので、インドのストーパ……の形を模したものである。」とした（井上1975）。

網干善教氏は中尾山古墳の調査を受けて、これまでの仏教による卒塔婆を起源とする研究に疑問を投げかけ、別の視点から八角墳について考察した（網干1975）。それに検討を加え、さらに詳細にまとめた論文を4年後に発表した。それによると八角形という形状の意識は『旧唐書』や『大唐郊祀録』の記述から、「八角は「円」の意識とするよりも、その根底にあるものは「方」である」とし、「天を祭る円壇をもって為し、地を祀るに方壇をもって行うということが「天円地方」の思想である。したがって「地は方なり」ということであり、地は国土、国家を意味する」と述べた。つまり、八角とは方であり、方は地であることから、それが国土、国家を示す具象として示した。そしてそれは「中国の古来からの政治的思想や制度が、わが国の政治思想や制度特に大化改新を契機として導入した、政治理念が根底をなすもの」とし、八角墳を「中央集権的律令体制の一つの具象」として認識した（網干1979）。

網干氏の研究に対して、田村圓澄氏は「高御座が八角方墳であることと、天皇陵が八角墳であることは、本質的に異なっており、同一の次元で論ずることはできない」とし、八角墳の初現とされるのが押坂陵である蓋然性が高い段ノ塚古墳であることから、舒明を「仏教帰依に踏み切った最初の天皇」とし、その仏教思想から「死後、仏国土への往生を求めていた天皇の信仰と、そして死後の天皇の安穩を願う近親・側近の祈願の結集として、仏国土の象徴である蓮華の八弁になぞらえ、八角墳の陵墓が築造された」と解釈した。また天武・持統天皇の檜隈大内陵とされる野口王墓古墳が八角墳であることについては、前提として飛鳥の都が仏都であり、「仏都のなかに築造されたことも両天皇の仏教信奉の事実を考えたとき、初めて理解できる」とし、仏教の思想が大いに影響しているとした（田村1981）。

直宮憲一氏は「天皇陵と呼ばれて来た古墳以外にもその墳形を有するもの」としつつ、「規模において天皇陵と他の八角墳の間には隔絶した違いはみられる」と示したうえで、「八角墳が即位された天皇陵にのみ、その形態を取ることができないものであるならば、他の八角墳はその絶大な権威を侵すこととなり小規模であったとしてもそのような形態を取ることには不敬にあたり、かつそのような形態を作ることがはたして許されるものであろうかという疑問が残る。」

とし、八角形自体に意味を求めた。それにより、「陰陽道がその底辺にある八卦というト占を持っており、死者の霊を最良の八卦に導こうとする所作が八方位を示す八角墳を生むことになった」とし、陰陽五行説との関係を示唆した（直宮1988）。

【構造に関する研究】

思想に関する研究はいずれも野口王墓古墳と中尾山古墳をはじめとした畿内の大王墓に採用された墳形であることを前提としたものであった。八角墳の意義が前述のいずれであれ、大王墓が他とは異なった墳形を採用したという点では共通した認識であった。しかし発掘調査事例の増加により、これら大王墓以外にも畿内以外において八角墳の存在が指摘されるようになるとともに、現在まで大王墓と畿内以外に分布する八角墳の比較研究も行われている。

大王墓としての八角墳に関する研究

白石太一郎氏は畿内の横穴式石室や出土須恵器の年代を検討し、終末期古墳の変遷を整理する中で八角墳について述べている。ここでは「それまで規模の差こそあれ、他の豪族の首長と同じ墳形を採用していた大王が、大王のみ固有の特殊な型式の陵墓を営むようになるわけで、当然大王の地位の確立と密接に関連するもの」とし、背景に「大王を諸豪族から隔絶した地位におくこととともに、大王を中心する中国風の中央集権国家の樹立」があったと想定した（白石1982）。

河上邦彦氏は大王墓とされる八角墳について、上下段の墳形の差異について着目し、「八角形墳と呼んでよいのは天武陵・東明神古墳・中尾山古墳の三基であって、それより古い舒明陵・岩屋山古墳・天智陵については上八角下方墳と呼ぶべき」とした。これにより、八角墳は「方墳から出現したもの」であるとし、6世紀末以後の大王墓は前方後円墳、大型方墳、上八角下方墳、八角墳の順に変化するとした（河上1999）。

今尾文昭氏は大王墓とされる八角墳を取り上げ、立地、方形壇、開口位置、規模、墓室、正面構造、墳丘の方位、火葬の有無について分類を行い、その結果からそれぞれに被葬者を推定した。さらに都城との関連性を取り上げ、「七世紀中葉の舒明陵以降、連続して採用されたとみなされる八角墳に込められた理念がここに新益京の都城計画と一体化することで、より高次元の形を表徴させた」とした。なお八角形という形は「大王ないし天皇支配が四方八方の全土に及び、その安寧が保たれんことを可視できるよう古墳の墳丘に表示したもの」であるとした（今尾2005）。

林部均氏は牽牛子塚古墳の調査成果を受け、押坂陵とされる段ノ塚古墳、齊明天皇の越智岡上陵とされる牽牛子塚古墳、山科陵とされる御廟野古墳は後世の改変によって八角墳になったとし、「八角墳の出現は天武陵に求めるのが妥当」であるとの見解を提示した。そして「大王は、古墳時代から飛鳥時代後半まで、一貫して有力豪族や有力首長と同じ形態をした古墳をつくりつづけてきたが、この段階にいたって、はじめて特別なかたちをした、そして、突出した規模をもつ古墳を造営するようになった。大王は、ヤマト政権の連合政権的な性格から脱し、律令国家の「天皇」として、律令官人制の頂点に君臨する特別な存在へと止揚される。」と八角墳の意義を述べた（林部2012）。

全国各地に分布する八角墳に関する研究

一瀬和夫氏は終末期古墳の墳丘を取り上げる中で、広島県福山市の尾市第1号古墳について横口式石槨から墳丘基準線を設定し、それをもとに検出されている列石をあてはめた結果、八角形とするより、「円を描く方がなお一層、石列との合致を見出すことができる」とし、この

古墳を「円墳である可能性が高い」と結論付けた（一瀬1988）。

脇坂光彦氏は大王とされる八角墳について「大王家の中でもきわめて限定された人物のみが採用できたものであり、それを導入した背景には、中国の政治思想が大きく作用していた」とした。地方の八角墳については、「①正確に八角形を呈しているものはない、②墳丘はいずれも小規模である、③埋葬主体は、尾市古墳以外は割石を積んだ小規模の横穴式石室である、④時期を把握しにくいものもあるが、7世紀代の構築と考えられる」とし、さらに「相違点もいくつか認められる」とした。そして大王墓とされる八角墳とそれ以外の八角墳の相関性については、「どのような結びつきがあったかは明らかでない」とし、「多角形墳はそれぞれが多様な内容をもっているため、各古墳の成立背景の研究にはそれぞれの地域性を十分考慮せねばならない」と述べた（脇坂1992）。

猪熊兼勝氏は外護列石に着目して、それぞれの年代を検討し、八角墳を「各地の外護列石墳の到達点」とした。特に7世紀の大王墓は「試行錯誤を繰り返しながら「八角形」になる」とした（猪熊1995）。

寺社下博氏は八角墳だけでなく六角墳の存在を認め、それらを多角形墳と総称し、特に大王墓以外の八角墳においては「大王（天皇）陵とは異なる性格を考えざるをえなくなっている」とした。そこで、大王墓以外の八角墳の多角形墳を分布、立地、規模などといった諸要素から分類し、「共通点と相違点を見出」した。さらに「大王陵の八角墳化に伴ってその影響と規制を受けつつ継続された」とし、その背景としては「方墳形態・円墳形態をともに否定する立場を基本にして武力による地方の拡張製作に携わった人々に地方を意味する八角形という形態が与えられた」と考えた。八角形自体については「陰陽道－八卦思想の存在は十分に考慮しなければならない」という見解を示した（寺社下1997）。

小林利晴氏は、大王墓とそれ以外の八角墳を外護列石と墳丘盛土、築造年代によって比較したうえで、「畿内の八角墳は規模の面でも地方の八角墳を圧倒しており、両者が違った意味合いで築造されたことは明らかである。おそらく直接的な関連性を求めることは難しい。」としつつ、三津屋古墳については「全ての属性が畿内の八角墳と一致する。地方の八角墳の中で三津屋古墳だけは、畿内の八角墳と何らかの関連性がある」と考えた。さらに「地方の多角形墳の分布には一貫性がなく、それぞれの間に関連性を考えることは出来ない」ことを明らかにした（小林1997）。

右島和夫氏は群馬県下の八角墳とされる古墳を検討し、「群集墳を構成するような通有の古墳に広く多角形墳が築造されることが明らかとなってきた」としたが、それらが「必ずしも角部を強調しようとする構造的意図が見出したがい」とし、「意図的な「多角形墳」として位置づけることが妥当か」と問題を提起している。そしてこれらを「円墳の一形態」として捉え、「多角形円墳」を提唱した。さらに各地域における多角形墳を中央と結びつけるのではなく、「各地域における古墳の動向・出現の必然性等の観点から再検討を経た上で論を展開させてもよいのでは」と、各地域での位置づけの重要性を述べた（右島2001）。

小川裕見子氏は地方の八角墳について、大阪府茨木市の桑原西古墳群の土器編年を基軸に編年を行い、畿内の八角墳が築造される前後の時期を通じて築かれることを明らかにした。そして、御廟野古墳の出現とはほぼ同時期に畿内周縁部の群集内において八角墳の築造が継承されず、地方にのみ築かれるとした。その背景として、「群集墳など下層の墳墓においては築造できないという墳丘規制」があるとし、地方においてのみ築かれている意義を「規制がこれらの地域

にまでは強く及んでいなかったため、模倣が許された」と理解した（小川2009）。

新納泉氏は大王墓としての八角墳と岡山県北房地域の定東塚・西塚古墳、定北古墳、大谷1号墳をそれぞれ立地、墳丘、年代などで比較した。畿内の中心地域以外の八角墳を「築造時期が確実に七世紀前半にさかのぼる例は現状では確認できない」とした上で、「大王墓を模してつくられたもの」と考えた（新納2012）。

以上が八角墳に関する研究略史である。これらを概略するとまず取り上げなければならないのが『阿不幾乃山陵記』の発見である。これにより八角墳の存在が初めて知られることとなり、同時に野口王墓古墳が檜隈大内陵であることがほぼ確実視されるようになった。そして仏教を基軸として思想的研究が多数行われることとなった。一方、網干氏により現在もなお有力な説となっている中国思想説といった新たな見解も述べられ、それまでの仏教との関わりは否定されつつある。その後の研究では、未だ仏教や陰陽五行説との関連を示唆する研究も行われているが、おおむねこの網干氏の研究が取り上げられ、現在もなお多く支持されている。また、全国各地で八角墳の事例が報告されるなど、資料がより充実したものとなってきている。それぞれ個別に検討が行われたり、各地域における位置づけなども提示されたりし、全国的に活発な研究が行われている。

さらに牽牛子塚古墳のように大王墓とされる八角墳についても再調査が行われ、他の八角墳との比較も行われている。そして近年は野口王墓古墳において過去に行われた踏査や調査の報告も行われ、考古学だけでなく古代史学にまでも大きな影響を与えている。

以上のように、1980年代までは八角形という思想の意義を中心に議論されてきたが、現在では全国各地における事例増加の影響から、大王墓としての八角墳と各地に分布する八角墳について比較検討が行われるようになった。八角形の思想的背景については網干氏の研究が定説化しつつあるが、全国各地の八角墳の比較検討はいまだ議論の余地が充分にある。また大王墓とされる八角墳の調査も行われ、特に墳丘に関して詳細なデータが得られている。

そこで本論では八角墳研究の基礎とすべく、全国各地に点在する八角墳について、新たに定義を定めて再検討を行う。

Ⅲ. 野口王墓古墳と牽牛子塚古墳の墳丘

発掘調査により八角墳として報告する場合もあれば、後の研究で新たに八角墳と指摘される場合もある。つまり、各々で八角墳として認識されているものの、その定義は定められておらず、個別に検討を行っているのが現状といえる。現在八角墳とされている古墳は、貼石、裾石、排水溝、盛土・地山成形、等高線などといった諸要素からその根拠を見出し、墳形を判断していたのである。

そこでまずは確実に八角墳と判断できる古墳を指標とし、それを構成する要素をもっていくつかの定義を設定することとする。その指標となる八角墳として、確実かつ類似した構造であることが明らかな野口王墓古墳と牽牛子塚古墳を取り上げ、最新の研究成果をふまえながら、まずはその概要及び墳丘構造について述べる。

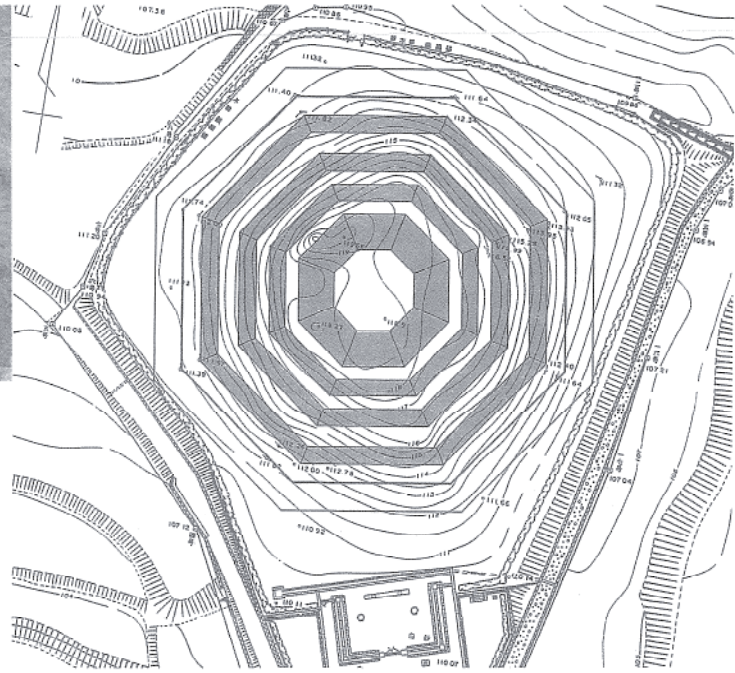
【野口王墓古墳】

野口王墓古墳は東西にのびる丘陵東端から南に張り出す尾根の頂上に位置している。この丘陵は西から梅山古墳、カナヅカ古墳、鬼ノ俎・雪隠古墳、野口王墓古墳とほぼ等間隔に築かれており、整然とした造墓計画が指摘されている（西光2002）。古くからその存在が知られてお



第1図 野口王墓古墳 角部

り、様々な絵図や文献で当時の野口王墓古墳が描かれている。埋葬施設は古くから開口していたようで、『大和名所圖會』や『菅笠日記』にもその様子が記されている。『阿不幾乃山陵記』によると石室の規模は全長8.1mで、玄室長4.6m、幅



第2図 野口王墓古墳 墳丘復元図 1/600

2.9m、高さ2.4m、羨道長3.5m、幅2.4m、高さ2.2mであることがわかる。玄室と羨道の境には獅子顔の把手が付いた両開きの金銅製扉が設けられ、いくつかの絵図からは切石による精美な石室であったことが窺える。埋葬施設内ではおそらく夾紵棺と考えられる棺が存在し、中には人骨や紅色の衣服、枕、玉類などがあったとされる。さらに金銅製の桶も確認されており、中には人骨と玉類があったことから、火葬骨をおさめた骨蔵器であることがわかる。

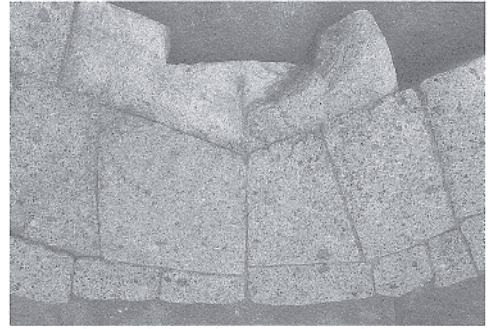
墳丘は、前述したように過去の調査成果が公表されたことにより、詳細なデータを得ることができた。それによると、調査区ではいずれも凝灰岩を確認することができることから、墳丘全面に貼石を施していることがわかる。合計で五段築成であり、最下段である一段目は高さ0.2mであり、裾にひろがる石敷状の遺構であることから、基壇的な性格を有する可能性が高いと指摘されている。二段目は1.7m、三段目は1.5m、四段目も同様に1.5mとなり、ほぼ同程度の高さとなるが、五段目については、貼石の依存状況等から現状で勘察すると3mとなる。二段目から四段目については、貼石四石と地覆石の合計五石でそれぞれ構成されており、角部の地覆石上面が135°の割り込みが施されている箇所がいくつか確認されている。またこれら五段築成の墳丘外側にも形状等は明確でないが、凝灰岩による石敷が施されている。

【牽牛子塚古墳】

牽牛子塚古墳は越峠から東西に続く尾根のさらに南へ舌状にのびた丘陵の頂部に位置している。埋葬施設は古くから開口しており、二上山凝灰岩を使用した南に開口する割り貫き式横口式石槨である。中央に間仕切りがあり、左右に二つの埋葬空間が設けられている。埋葬施設の外側には石英安山岩の切石が上下約2段で設置されており、合計16石存在する。出土遺物としては、夾紵棺片や棺金具、ガラス玉などがある。

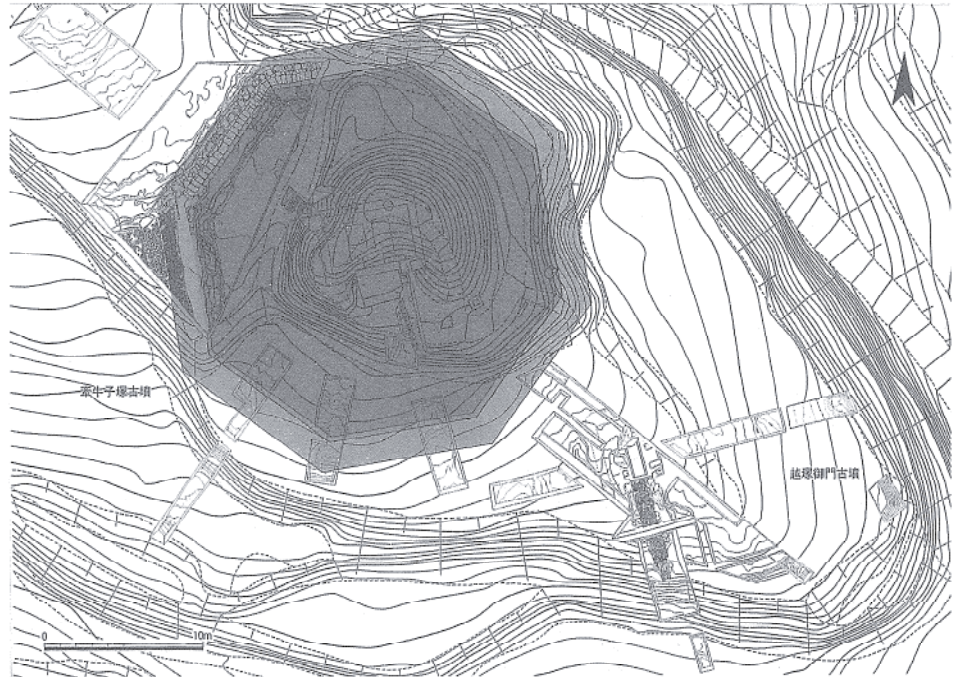
墳丘については、厚さ約4cmの版築により築かれた、対辺約22m、高さ4.5m以上の八角墳である。墳丘裾では、花崗岩風化土の地山面を八角形に削り出し、幅約1m、深さ約0.2mの溝を掘り、二上山凝灰岩の切石を敷きつめている（以下、裾石敷）。裾石敷は、両端に縦長の

石を並べ、中央にそれに直行する形で設置し、平面形が「H」状となるよう切石が敷き詰められている。一部で石材の角度が 135° となる箇所が存在することから八角墳であることが判明した。また、堆積土内からは、切石の端面が約 65° に加工された石材が7点出土している。このような傾斜角を有する石材の出土から、本来は墳丘斜面に施されていたことが想定できる。さらにこの裾石敷の西側には川原石を敷き詰めた二重のバラス敷が取り付け



第3図 牽牛子塚古墳 角部

られている。このバラス敷の中央では裾石敷と平行して仕切り石が設けられており、これを境として西側は約0.1m低くなっている。しかし北西部の裾石敷の外側では、花崗岩風化土の地山面となっており、バラス敷は確認されていない。ここでは、約0.6mの花崗岩



第4図 牽牛子塚古墳 墳丘復元図 1/500

抜き取り痕が存在することから、地山の法面処理として、花崗岩が施されていたと考えることができる。

IV. 八角墳の再検討

ここでは、前述したように野口王墓古墳と牽牛子塚古墳の墳丘を指標として八角墳の再検討を行う。まずは定義とすべく、いくつかの条件を提示する。

そもそも八角墳であることから、角部が存在することは言うまでもない。角部が明確でなければ、円墳とも方墳とも判断できてしまう場合もあるからである。調査の結果、野口王墓古墳では7箇所、牽牛子塚古墳で1箇所確認されている。また八角墳として意図的に築くには、角部に何らかの強調が必要となるため、目地等の存在が必須となる。野口王墓古墳では角部の地覆石上面に 135° の切り込みを入れ、斜面となる石材を載せていたと考えられる。牽牛子塚古墳は裾石敷の一部に 135° となる角部が明瞭に残存している。いずれも角部を明確に創出していることがわかる。

さらには平面プランが正八角形を意図していることも当然の条件となってくる。正八角形は一つの外角と中心角は 45° で、内角は 135° となる。牽牛子塚古墳の角部について、斜面ではなく平坦面で確認できたことから、ズレが生じることなく、 135° を呈している。しかし斜面等に



第5図 分布図



第6図 分布図(拡大)

- 1.三津屋古墳 2.伊勢塚古墳 3.武井廃寺古墳 4.一本杉古墳 5.籠原裏1号墳 6.稻荷塚古墳 7.経塚古墳
 8.垣内田10号墳 9.御廟野古墳 10.御堂ヶ池20号墳 11.国分45号墳 12.段ノ塚古墳 13.岩屋山古墳
 14.牽牛子塚古墳 15.中尾山古墳 16.野口王墓古墳 17.東明神古墳 18.上城古墳 19.上ノ山古墳 20.石宝殿古墳
 21.桑原C3号墳 22.中山荘園古墳 23.尾市第1号古墳 24.梶山古墳 25.福本70号墳

設置されている場合は、造営からの年月を考慮すると風雨による影響などで 135° にはならず、さらには施工途中等の作業においても少しのズレが生じる場合も想定される。基本的には正八角形を意図して造営していなければ、各角部において 135° に近い数値になる可能性が低いことから、 135° と大きく異なる箇所がある場合は八角墳と定めることはできない。

そして最後に重要な要素となってくるのが、墳丘全面に貼石または葺石が施されているかという点である。墳丘全面に貼石等が施されていない場合は、角部の 135° と同様に風雨の影響を受けて土砂が流出し、盛土によって角部を形成しても恒久的な墳丘を維持することができない。また八角墳という墳形はそれまでの円墳や方墳との差異を明確に示すために新たに創出されたものである可能性が高いことから、視覚的に認識できる形状でなければ、造営者側にとってその本来的な意味をなさなくなってしまうため、貼石等は必須であると考えられる。以上をまとめると以下のとおりである。

①角部について石材の配置等からそれが明確である。② 135° となる内角が存在し、平面プランが正八角形を呈する。③墳丘の全面に貼石等が施されている。

これらを定義とし、これまで全国で八角墳として報告・指摘されている25基の古墳について再検討を試みる。なお角部が確実に存在し、円墳でも方墳でもない場合について、定義の①を満たしていれば、正円や正方でないという観点から「多角円墳」又は「多角方墳」と呼称する⁽²⁾。

【三津屋古墳】群馬県吉岡町

宅地造成に伴う事前の竹林伐採作業中に古墳状隆起が確認され、調査に至った古墳である。

そのため、残存状況が良好でなく、埋葬施設に関しては基底石の一部しか残存していなかった(吉岡町教委1996)。

墳丘についても大きく削平されていたが、北半分は比較的良好に残存していた。調査で判明した墳丘の貼石は人頭大の川原石を用いて、斜面全体に施工されている。八角形の角部の石材は他より大きく、通し目状に積みあげ、それ以外の面は乱雑に積み上げている。コーナー部分は3か所検出され、いずれも135°に近い数字である。以上のことを勘案すると定義のいずれにも当てはまることから、八角墳であるといえる。

【伊勢塚古墳】群馬県藤岡市

伊勢塚古墳は墳丘に幅2mの調査区を中心から四方に伸びるように設定している。これらの調査区からは墳丘裾が見つかり、それらを線でつなぐと隅丸方形を呈することがわかる。暗渠排水溝や石積が直線を呈していることや、墳丘実測図の等高線の変化から八角墳であると指摘されている(志村1997)。

調査区範囲の制約により墳丘構造の全貌は不明であるが、これまでの調査成果を考慮し、直線箇所がいくつか検出されたことを重要視すると、基本的に方形プランでそれぞれの角を隅切にした形状となる可能性が高い。角部が確認できるが、それぞれの内角が135°となり、正八角形として復元することは困難であることから多角方墳であると考えられる。

【武井廃寺古墳】群馬県桐生市

武井廃寺古墳は当初、古墳の名称からもわかるように塔の基壇として理解され、廃寺の一部と認識されてきた(尾崎1958)。しかし発掘調査の結果、側柱を支える礎石や根石などの痕跡が周辺では認められず、近辺において瓦などの建築部材等が出土していないことや伽藍配置の推定も困難なことなどから、廃寺ではなく骨臓器を納める火葬墓の可能性を指摘された(平野1986)。そして斜面上に築かれていることから段築の高さに差があるものの、三段築成で南側のみ四段となる全面葺石に覆われた八角墳であると推定された。角部を強調する明確な石材は見受けられないが、意図的に角部を創出しているとともに、石材の配置状況から明らかに平面プランが正八角形を呈していることから武井廃寺古墳は八角墳と判断できる。

【一本杉古墳】群馬県高崎市

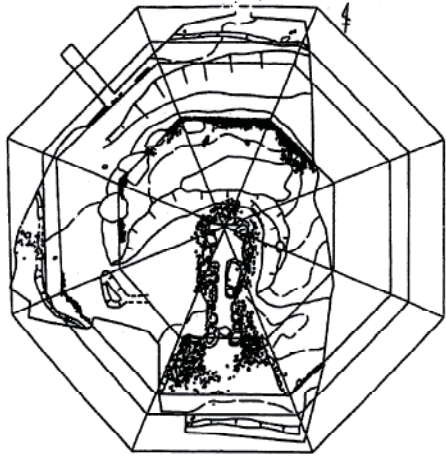
一本杉古墳は、1960(昭和35)年に調査が行われ、墳丘裾の三箇所の葺石の配列が約135°~140°の角度で屈曲し、その角部は稜を有していることから八角墳と推定されるようになった(梅澤1961)。

しかし各辺の距離が異なり、検出した葺石及び測量図を照らし合わせても正八角形にはならず、角部の稜とされる葺石はそれぞれの角部で状態が異なることから、統一的に施工された可能性は低い。近年当時の調査担当者によって墳丘の再検討が行われ、前述の問題点を上下段築成による傾斜の影響により、ブレが生じていると解釈された(梅澤1997)。ただ、調査範囲の狭さなどから現段階ではそれをブレとして認めることはできず、角部を強調する葺石の存在し、全面に貼石が認められないことから、多角円墳として捉えたほうが妥当と考える。

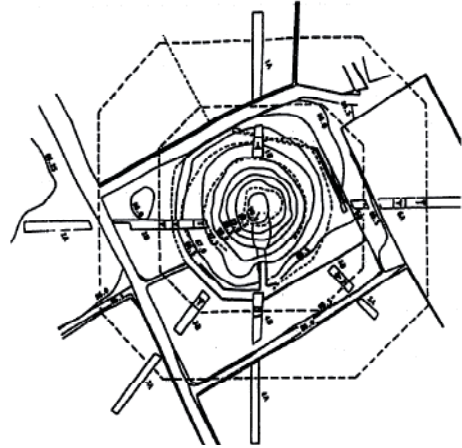
【籠原裏1号墳】埼玉県熊谷市

籠原裏1号墳は、墳丘の上部が削平されているが、残存する墳丘の一部に葺石が施され、その一部が角部状となっており、平面を八角形とすることができることから、八角墳とされている(寺社下1997)。

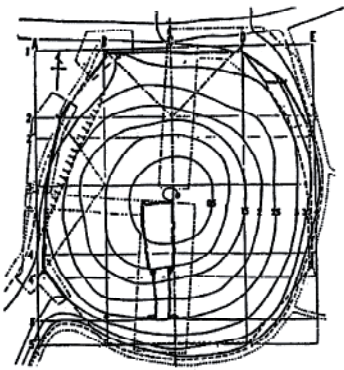
再度検討を行った結果、角部にそれを強調する葺石の配置は見られないのに加え、墳丘全面



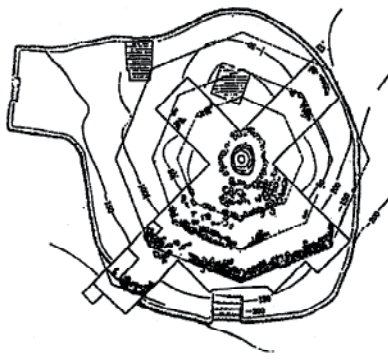
第7図 三津屋古墳 1/500



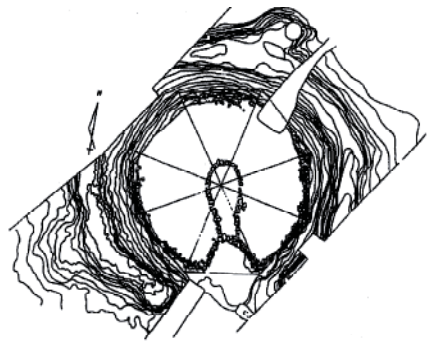
第8図 伊勢塚古墳 1/600



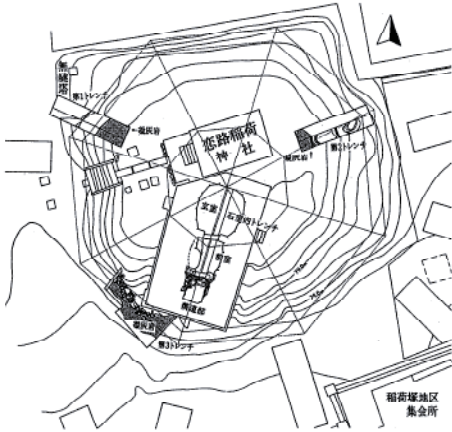
第9図 一本杉古墳 1/500



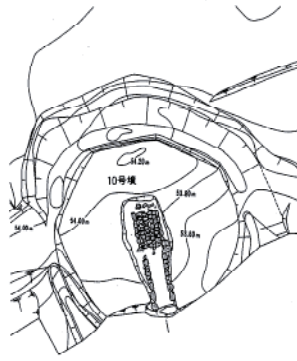
第10図 三津屋古墳 1/500



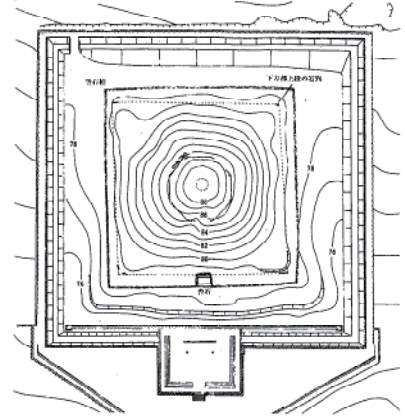
第11図 籠原裏1号墳 1/500



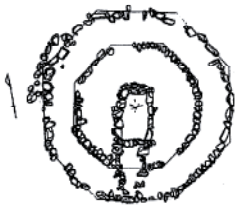
第12図 稻荷塚古墳 1/500



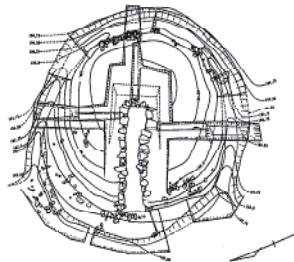
第14図 垣内田10号墳 1/500



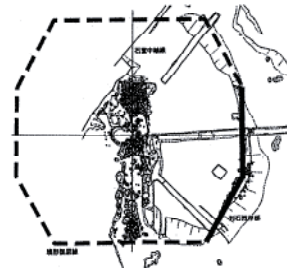
第15図 御廟野古墳 1/2000



第13図 経塚古墳 1/500



第16図 御堂池20号墳 1/400



第17図 国分45号墳 1/500

に葺石が施されていた可能性が低いことから、円墳と考える。

【稲荷塚古墳】 東京都多摩市

稲荷塚古墳は、周溝を八角形に削り、一部に外護列石と呼ばれている貼石状の石材が検出され、周溝の八角形プランと平行となることから、正八角形ではないが、八角墳であると報告されている（多摩市教委1996）。

しかし墳丘全面に貼石が施されていたかは判然とせず、さらに正八角形とならないことから、八角墳と判断することは現状では不可能である。ただし、外護列石が直線であることに加え、周溝も角部が確認できることから、多角円墳と考える。

【経塚古墳】 山梨県笛吹市

経塚古墳は、外護列石が三重にめぐり、それが八角形を呈していることから、八角墳とされている（山梨県教委1985）。

現状では墳丘全面に貼石の存在は確認できず、明確な八角形の角部も不明である。直線の描き方によっては角部とする考えも可能であるが、築造時の単位もしくは地震等による崩落のズレの可能性を考えるほうが妥当と思われる。よって現段階では経塚古墳を円墳と考える。

【垣内田10号墳】 三重県松阪市

垣内田10号墳は墳丘の三箇所 130° ～ 140° のコーナーが認められることから、八角墳と報告されている（三重県教委1990）。

しかし、葺石や列石は確認されておらず、盛土の整形のみによる判断である。さらに南側は大きく削平されており、形状を求められない。垣内田10号墳をはじめとして垣内田古墳群のほとんどが、墳丘上部の削平が著しい。本来は墳丘に葺石や列石が存在したことも想定できるが、現時点ではそれを認めることができない。また、盛土による整形のみであり、定義の③でも示したように八角墳として視覚的に認識できるよう築造したとは考え難いため、八角墳と認めることはできないことから、円墳と考える。

【御廟野古墳】 京都市山科区

御廟野古墳は中世において御陵郷の存在が確認できることから、治定の真偽についても古代までさかのぼることができる（丸山2001）。中尾山古墳の発掘を契機として、八角墳に対する関心が高まり、墳丘内の踏査が行われ、墳頂部に花崗岩による八角形の石列が確認された（末永2013）。その後宮内庁により、落葉と腐植土を取り除く調査が実施された（笠野1988）。その結果、上円部と下方部からなる墳丘のうち、上円部は墳頂外周に花崗岩の切石を用いた石列が八角形にめぐり、さらにその上部もしくは内側にも八角形に石材が並べられていることが判明した。また墳丘斜面には全面に花崗岩による川原石が無数に転がっている。下方部については、二段からなり、花崗岩の石列がめぐる。

以上のことから、御廟野古墳は墳丘斜面においてこそ明確なコーナー部分を確認することはできないが、墳頂では確実に八角形とできる石列がめぐり、角部も存在する。また、全面に川原石が施されていることから、八角墳としても差し支えないと考える。

【御堂ヶ池20号墳】 京都市右京区

御堂ヶ池20号墳は1973年の調査報告によると楕円形の墳丘と報告されていた（六勝寺研究会1973）が、後に八角墳とする研究が発表された（小川2009b）。それによると報告書の写真から外護列石と周溝に明瞭な角が見られ、測量図からも八角墳と判断できるとされている。

しかしあらためて当時の写真と測量図を見てみると、石列及び周溝において角と考えられて

いる箇所は判断が難しく、石列に関しては一部しか存在しない。さらには周溝もすべてにおいて明瞭な角を見出すことはできない。貼石も調査報告の限りでは認められない。以上のことから、御堂ヶ池20号墳は円墳とするのが妥当であると考えられる。

【国分45号墳】 京都府亀岡市

国分45号墳は、墳丘の上部が大きく削平されていたが、墳丘裾に施工されていた外護列石がわずかに残存していた。その状況から八角墳であると報告されている（京都府埋文2008）。

しかし直線状に並んだ外護列石は東側から南側にかけての2箇所で確認されているだけで、他では見受けられない。また角部と想定されている箇所においては全く135°にならず、正八角形とすることは不可能で、平面プランは極めて方形に近いものとなっている。つまり八角墳とするより方墳をベースとして角部を切り取った多角方墳と考える。

【段ノ塚古墳】 奈良県桜井市

段ノ塚古墳は前面の三段のテラス状張り出しが古くから認識されている。その上部に位置する墳丘については、御廟野古墳と同様に立ち入り調査が行われるとともに、表面の腐植土等を除去する調査の結果、その三段を含む上二段下三段の合計五段築成であることが判明した（笠野1995）。上二段は墳丘全面に榛原石が積まれた八角墳で、下三段は花崗岩による貼石が施されている。

また上二段については隅角が南を向き、そこに短辺が付設されており、正確には九角墳となる。しかし現時点でこれが設計当初の構造なのか、追葬などに伴う改変であるかは不明である。八角墳のコーナー部分では内角が135°となる石材を施工している箇所が数カ所確認でき、平面プランが正八角形を意図しているということは十分に考えることができる。以上のことから、石材によって135°の角部が明瞭であり、正八角形の平面プランであること、さらには墳丘全面に貼石を施していることから、従来通り八角墳であると認めることができる。

【岩屋山古墳】 奈良県明日香村

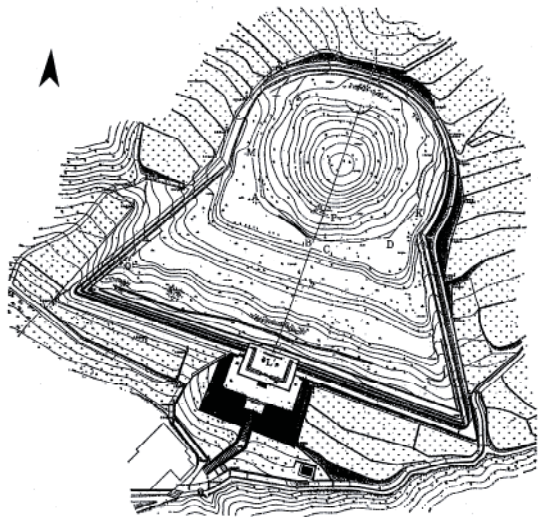
岩屋山古墳は1973（昭和48）年に測量調査が、1978（昭和53）年に発掘調査が実施され、上下二段築成の方墳であることが報告された（明日香村教委1980）。この調査では墳丘部分において礫がいくつか検出され、葺石の存在が示唆されたが、墳形を決定づけるものはなかった。その後、上段に45°近い角度の直線が存在するため、八角墳であるという見解も提示された（白石1982）。

しかし前述した発掘調査の際の調査区では八角墳の痕跡を認めることができず、角部の強調はもちろん、現状から墳丘全面に石材が施されていたと考えるのは困難である。今後、これまで調査が行われていない墳丘の別の箇所に調査区が設定されて発掘調査が実施され、八角墳の根拠となる遺構が検出されない限り、八角墳として認めることはできない。よって現状では方墳と判断する。

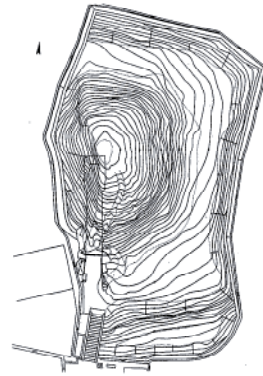
【中尾山古墳】 奈良県明日香村

中尾山古墳は1894（明治27）年段階では全面が礫に覆われている三段築成の円墳であると報告されている（野淵1894）。

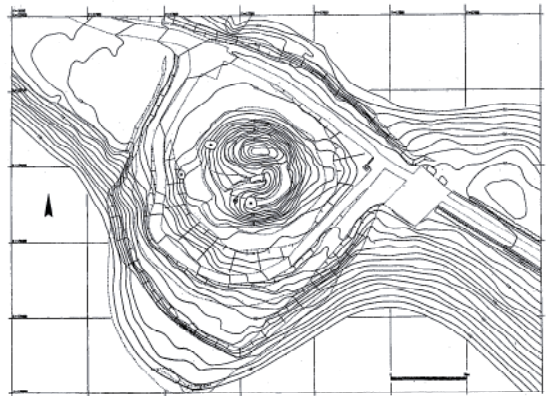
現状では段築は認められないが、発掘調査の結果、墳丘は各段の裾に八角形の一部となる50cm以上の石材を据え、さらにそれより小さな石材を並べて八角形のコーナー及び直線を形成していることが判明した（明日香村教委1975）。また現存する石材の量から本来は墳丘全面に川原石が施工されていたと考えられる。前述した八角形を示す石列とその角部を示す仕切りの



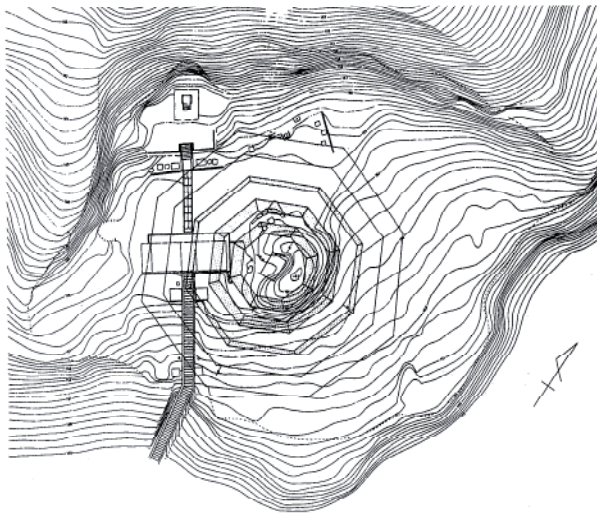
第18図 段ノ塚古墳 1/2000



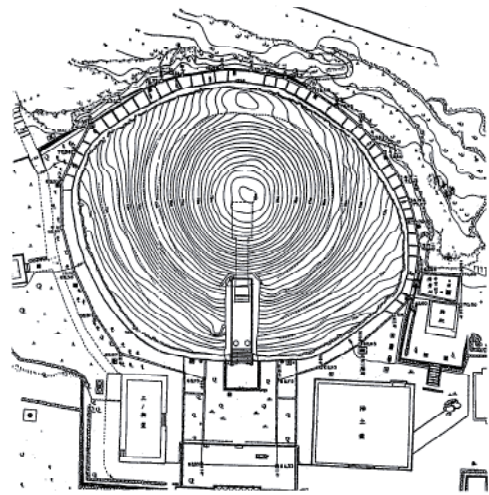
第19図 岩屋山古墳 1/1000



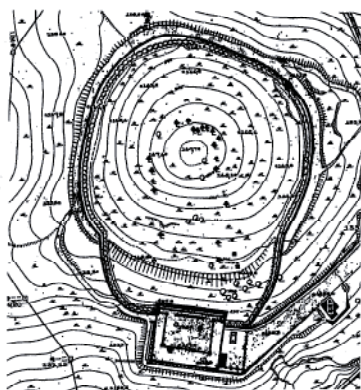
第20図 中尾山古墳 1/1000



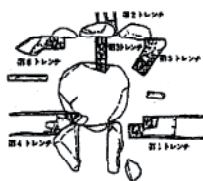
第21図 束明神古墳 1/1000



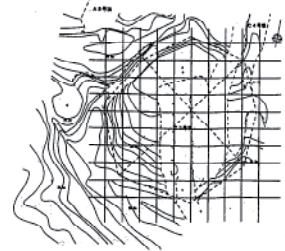
第22図 上城古墳 1/1200



第23図 上ノ山古墳 1/1000



第24図 石宝殿古墳



第25図 桑原C3号墳 1/500

石列も検出されており、平面プランが正八角形を呈することから、当初から八角形を意識して築造されていることは明らかである。さらにその外側には二重のバラス敷が施されており、内側が外側よりやや高くなる構造となり、同じく八角形を呈している。

以上のように中尾山古墳は墳丘全面に貼石を施し、角部を強調するように石材を配列し、正八角形を呈することからまさに八角墳であるといえる。

【東明神古墳】 奈良県高取町

東明神古墳は中世に葺石が新たに施されるなど、改変等が著しく、築造当初の形状を把握することは困難であるが、地山掘り込み事業や残存する墳丘部分の形状から八角墳であるとされた（檀考研1984）。

中尾山古墳の下二段にみられる貼石と類似するものが検出されているが、幅約50cmと狭い範囲であるため、現状では積極的に八角墳に関連する遺構であるとは評価しがたい。八角墳の根拠となるものが、地山掘り込み事業や残存する墳丘の形状だけであり、八角墳の定義に当てはまる要素は見出せない。後世の改変が著しいとしても八角墳として貼石で装飾しているならば、墳丘の一部が残存していることから、わずかでも残存している可能性がある。しかしそれを全く確認できないことから、築造当初から貼石が施されていないと考えるのが妥当であると考えられる。以上のことから東明神古墳は八角墳ではなく、現段階では円墳とする。

【上城古墳】 大阪府太子町

上城古墳は従来50m前後の円墳であるとされてきたが、等高線に直線部分がいくつか見られることから、八角墳である可能性が指摘されている（今尾2005）。

しかし宮内庁による詳細な地形図作成の結果、円墳である可能性が高くなるとともに、貼石などの施設が存在しないことが明らかとなった。つまり、上城古墳は現状を見る限り角部が見受けられず、貼石も存在しないことから八角墳である可能性は低く、円墳と判断する。

【上ノ山古墳】 大阪府太子町

上ノ山古墳は直径約35mの円墳とされている。宮内庁により孝徳天皇の大坂磯長陵に治定されているため、詳細は不明であるが、地元に残された江戸時代の文献から、洞窟、つまり石室の中に石棺があることがわかっている。陵墓地形図は円墳状を呈しているが、発掘調査が行われていないため、八角墳の可能性はあるとされている。これが八角墳である可能性を示唆される根拠としては、被葬者が孝徳天皇であるか否かである点が大い。

孝徳天皇の大坂磯長陵は『日本書紀』に記され、大坂の地名から、上城古墳や太平塚古墳がその候補としてあげられるが（山本2009）、いずれにしても根拠性に乏しい。上ノ山古墳についても発掘調査が行えず、地形図をみる限りは円墳としか捉えることができないため、現段階では円墳として判断する。

【石宝殿古墳】 大阪府寝屋川市

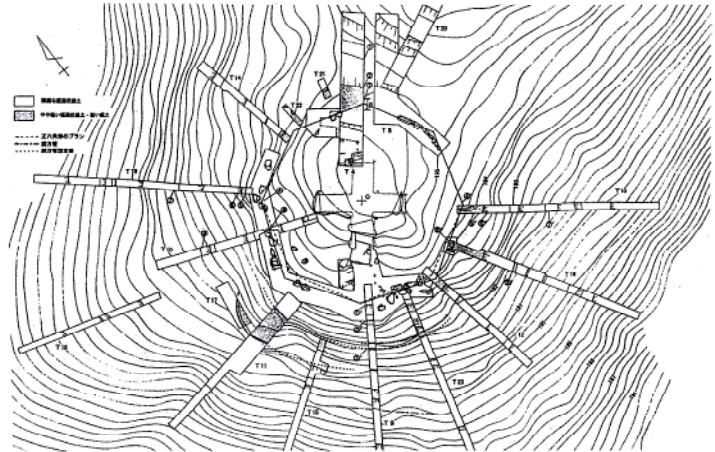
石宝殿古墳は、埋葬施設である横口式石槨の前方の両側に花崗岩の巨石が並び、石槨背後にも同様に巨石が並んでいる（寝屋川市教委1990）。その巨石が135°の稜角をつくることから、八角墳であると指摘されている。

墳丘の盛土については、削平されているため不明であるが、貼石が存在した痕跡は全く見受けられない。また巨石の稜角をつなぎ合わせても正八角形にはならないため、八角墳とすることはできず、現状から円墳と判断する。

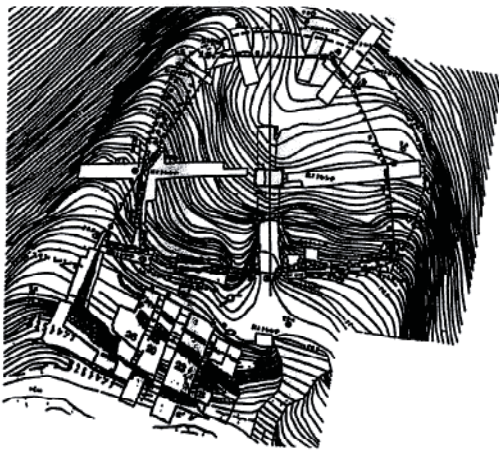
【桑原C3号墳】 大阪府茨木市



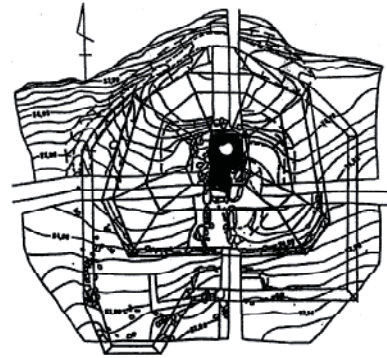
第26図 中山荘園古墳 1/400



第27図 尾市第1号墳 1/400



第28図 横山古墳 1/500



第29図 福本70号墳 1/500

桑原西古墳群の一角に位置する。墳丘は北から西側にかけてめぐる墳丘内排水溝が直線と角部を有し、南側の周溝が石室開口部から両脇にかけてひらきながら稜角を形成する八角墳と報告されている（大阪府教委2007）。

しかし平面プランは正八角形にならず、明確な角部は周溝と墳丘内にしか存在せず、貼石も確認できていない。そのため側面観を意識して造営されているとは考え難いことから、八角墳ではなく多角円墳と考えるのが妥当である。

またこの古墳が同じ群集墳内で埋葬施設、副葬品などが他と比べ、突出して優れていることが指摘されているが、墳丘内排水溝など、他の墳丘にはない要素で差別化を図っているのみである。墳丘が多角円墳であるのが、他との差別化に何らかの影響を与えているとしても、この古墳が八角墳である可能性は低い。

【中山荘園古墳】兵庫県宝塚市

中山荘園古墳は、発掘調査の結果、墳丘裾に設置された六辺分の外護列石と石室開口部に張り出したテラス部分に施された貼石の存在が明らかになった（宝塚市教委1983）。平面上は一部を除いて八角形を呈し、そのコーナー部分も135°にはならないがそれに近い数字となることから、これまで八角墳と指摘されてきた。

しかし八角墳の根拠となる六辺分の外護列石は墳丘裾にのみ施されたものであり、裾以外で

は全く確認されていない。また石室開口部では、テラス状の張り出しとなり、正八角形にはならない。よって正面からでは八角形のコーナーを見ることはできず、墳丘も恒久的に築造当初の形状を維持する工夫が見られないため、八角墳とすることはできない。しかし明らかにコーナー部分が存在するため、多角円墳とするが、今後何らかの意義づけが必要であると考え。

【尾市第1号古墳】 広島県福山市

尾市第1号古墳は標高190m前後の丘陵先端の頂部に築かれており、南側の前面は急斜面を呈した地形となっている。十字形の横口式石槨を埋葬施設とした特異な構造で、以前から注目されていた。

発掘調査により、墳丘裾の列石の存在が確認され、それらが角を呈するため、八角墳と指摘された（福山市教委2008）。しかし列石の配置から八角形とするよりも円形とするほうが適切であると考え。墳丘は正円ではなく、八角墳と認識されるほど角を有しているように見えるのは、丘陵頂上の狭い範囲での築造であったため、制約が生じた可能性や築造後まもなく崩れてしまったことも想定できる。以上のことから、尾市第1号古墳は円墳と考える。

【梶山古墳】 鳥取県鳥取市

梶山古墳は墳丘の南側斜面に築かれた変形八角墳と報告されている。墳丘の背後、つまり斜面側にいくつか角部が見受けられることから八角墳とされた（国府町1995）。

しかし、確認できる形状からこれは斜面に築かれたため、地形に則するように隅切状に整形されたと考えられる。つまり、梶山古墳は八角墳ではなく、多角方墳と考える。

【福本70号墳】 鳥取県八頭町

福本70号墳も前述の梶山古墳と同様に斜面に築かれたいわゆる変形八角墳とされている（郡家町1995）。梶山古墳と同様に斜面上に築かれたという制約から隅切を行うに至ったと考えるのが妥当であるため、多角方墳として位置づける。

梶山古墳や福本70号墳は、いずれも隅切を行った多角方墳であり、他地域において類似した構造が見られないこと、さらに梶山古墳については石室壁面に壁画が描かれていること等を勘案し、独自の築造背景もしくは技術についてさらに検討しなければならない。

V. おわりに

本稿は八角墳について、基礎的研究とすべく研究史及び定義について述べてきた。研究史は飛鳥時代の古墳を語る上では欠かすことのできない『阿不幾乃山陵記』に始まり、現在いたる先学の成果を紹介した。これまでにおける研究水準の高さを改めて実感したとともに今後に向けた課題もいくつか明らかになった。

そして今回、その課題の一つである八角墳の定義について、現在八角墳と報告・指摘されている25基の古墳を、野口王墓古墳と牽牛子塚古墳の調査成果より定めて再検討を行ってきた。その結果、八角墳は三津屋古墳、武井廃寺古墳、御廟野古墳、段ノ塚古墳、野口王墓古墳、牽牛子塚古墳、中尾山古墳の7基のみであることが判明し、これまで八角墳と報告・指摘されてきた古墳は多角円墳、多角方墳、円墳のいずれかであることが明らかとなった。八角墳のうち、御廟野古墳、段ノ塚古墳、野口王墓古墳、牽牛子塚古墳、中尾山古墳については、これまで述べているように大王墓である可能性が指摘されている。一方、三津屋古墳と武井廃寺古墳については、群馬県に所在する点から大王墓と考えることは困難であり、大王墓としての八角墳の模倣あるいは全く別の思想により造営されたものなどが想像される。今後は三津屋古墳や武井

廃寺古墳の各地域における位置づけを明らかにし、周辺の古墳や遺跡との関連性を含め、多方面からの検討が必要となってくる。また、今回の再検討により、これまで八角墳とされてきた古墳を多角円墳や多角方墳、円墳などと判断したが、これらについても周辺の古墳とは異なる要素を備えている場合が多く、単に八角墳ではないという結論で終わらせるのではなく、新たな意義づけも行っていかなければならない。さらには今後の調査研究により、これまで指摘されてこなかった古墳についても新たに八角墳と判断できることも考えられる。

本稿はあくまで基礎的研究として、八角墳について再検討を行ったのみである。今回の検討方法は確実に八角墳を造営する意図が窺える古墳を指標としているため、全国的に一律の定義を用いることに違和感があるかもしれないが、大王墓とそれ以外の八角墳について考えるための一つの視点として試みたものである。今後、それぞれの年代⁽³⁾や築造意義などの検討も行い、古墳文化の最終末期、さらには律令国家形成期という「日本国」誕生に欠かすことのできない激動の時代について、さらなる解明を目指すこととする。

最後に本稿を成すにあたって関西大学文学部教授 米田文孝先生のご指導を得、明日香村教育委員会調整員 西光慎治氏の校閲をいただきました。ご尽力を賜りました両氏に厚く御礼を申し上げます。

〈註〉

- (1) 天皇という呼称が使用されるのは飛鳥時代後半であり、それまでは大王であるが、本稿では便宜上、人物名に限り用いる。なお、天皇が葬られる古墳については、大王墓という名称を使用する。
- (2) 「Ⅱ. 調査研究史」で述べたとおり右島氏がすでに「多角形円墳」の存在を指摘されている。
- (3) 大王墓としての八角墳に関する年代については別稿を用意している。

〈参考文献〉

- 網干善教1975「中尾山古墳の外形についての私見」『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』明日香村教育委員会
網干善教1979「八角方墳とその意義」『橿原考古学研究所論集』五 吉川弘文館
一瀬和夫1988「終末期古墳の墳丘」『網干善教先生華甲記念考古学論集』網干善教先生華甲記念会
猪熊兼勝1995「飛鳥時代の天皇陵の成立序説」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集文化財論叢Ⅱ』
同朋舎
井上 薫1975「高松塚三題」『時野谷勝教授退官記念 日本史論集』同刊行会
今尾文昭2005「八角墳の出現と展開」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
岸本直文2014「野口王墓古墳への立入り観察」『ヒストリア』第243号 大阪歴史学会
小川裕見子2009a「終末期群集墳内における八角墳と大型八角墳の関係」『古代学研究』184 古代学研究会
小川裕見子2009b「茨木市桑原西古墳群と亀岡市国分古墳群の八角墳」『京都府の群集墳』
第16回京都府埋蔵文化財研究集会
小林利晴1997「畿内の八角墳と地方の八角墳の比較」『東京考古』15 東京考古談話会
西光慎治2011「牽牛子塚古墳・越塚御門古墳の調査成果－律令国家形成期の大王墓の実像－」『日本考古学』
第32号 日本考古学協会
西光慎治2013「牽牛子塚古墳の築造規格」『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』
－飛鳥の刳り貫き式横口式石槨墳の調査－』明日香村教育委員会 第10集
寺社下博1997「地方の多角形墳」『倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学』同刊行会
白石太一郎1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一集 国立歴史民俗博物館

- 末永雅雄 1975 『古墳の航空大観』 学生社
- 菅谷文則 1969 「八角堂の建立を通じてみた古墳終末時の一様相」 『史泉』 第40号 関西大学史学会
- 辰巳俊輔 2013 「飛鳥の八角墳～中尾山古墳～」 『牽牛子塚古墳発掘調査報告書
- 飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査 -』 明日香村教育委員会 第10集
- 田中教忠 1906 「阿不幾乃山陵記考証」 『考古界』 五-六
- 田村圓澄 1981 「八角墳と舒明天皇一家の仏教信仰」 『仏教史学研究』 第23巻第1号 仏教史学会
- 直宮憲一 1988 「八角墳再考」 『網干善教先生華甲記念考古學論集』 網干善教先生華甲記念会
- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1981 『飛鳥時代の古墳』
- 新納 泉 2012 「古墳の終末」 『講座日本の考古学 8 古墳時代 (下)』 青木書店
- 林部 均 2012 「終末期古墳の様相」 『古墳出現と展開の地域相』 古墳時代の考古学 2 同成社
- 福尾正彦 2013 「八角墳の墳丘構造-押坂内陵・山科陵・檜隈大内陵」 『牽牛子塚古墳発掘調査報告書
- 飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査 -』 明日香村教育委員会 第10集
- 藤沢一夫 1959 「行基菩薩の墓塔-奈良時代墳墓の封土に対する一解釈-」 『古代文化』 第三巻第十號
古代学協会
- 丸山竜平 2001 「検証天智天皇陵」 『歴史検証天皇陵』 別冊歴史読売 新人物往来社
- 右島和夫 2001 「6世紀後半における多角形円墳の出現とその背景-群馬県地域における八角形墳の再検討-」
『群馬県立歴史博物館紀要』 第22号 群馬県立博物館
- 安井良三 1964 「天武天皇の葬礼考-『日本書紀』記載の仏教関係記事」 『日本書紀研究』 第一冊 塙書房
- 柳沢伊佐男 2013 「天武・持統陵の発掘資料」 『季刊考古学』 第124号 特集天皇陵古墳のいま 雄山閣
- 山本 彰 1993 「聖徳太子磯長墓考」 『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』 同刊行会
- 脇坂光彦 1992 「八角形墳」 『季刊考古学』 第40号 雄山閣

〈遺跡文献〉

【群馬県】

- 梅澤重昭 1961 「多野郡吉井町神保一本杉古墳調査概報」 『群馬県立博物館報』 第4号
- 梅澤重昭 1997 「吉井町一本杉古墳の八角形墳丘」 『月刊考古学ジャーナル』 3月号 No.414
- 尾崎喜左雄 1958 「(1) 史跡武井廃寺跡」 『勢多郡誌』 勢多郡誌編纂委員会
- 志村 哲 1997 「伊勢塚古墳の八角形墳丘プラン」 『考古学ジャーナル 特集・東日本の八角形墳』 No.414
ニュー・サイエンス社
- 平野進一 1986 「29 武井廃寺古墳」 『群馬県史 資料編 2 原始古代 2』 群馬県史編さん委員会
- 吉岡町教育委員会 1996 『三津屋古墳-八角形墳の調査-』 吉岡町文化財調査報告書第7集

【埼玉県】

- 寺社下博 1987 「熊谷市籠原裏遺跡の調査」 『第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会

【東京都】

- 多摩市教育委員会 1996 『東京都指定史跡 稲荷塚古墳-墳丘部確認にともなう調査-』
多摩市埋蔵文化財調査報告 39

【山梨県】

- 山梨県教育委員会 1985 『経塚古墳』

【三重県】

- 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990
『近畿自動車道 (久居～勢和) 埋蔵文化財発掘調査報告-第二分冊 二-』

【京都府】

- 笠野 毅 1987 「天智天皇山科陵の墳丘遺構」 『書陵部紀要』 第39号 宮内庁書陵部

京都府埋蔵文化財調査研究センター2008『京都府遺跡調査報告書』第129冊

六勝寺研究会1973『御堂ヶ池20号墳 発掘調査報告』

【大阪府】

大阪府教委委員会2007『桑原遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2007-4

寝屋川市教育委員会1990『石宝殿古墳』『寝屋川市文化財資料』I

陵墓調査室2009『聖徳太子 磯長墓の墳丘・結界石および御霊屋内調査報告』『書陵部紀要』第60号

宮内庁書陵部

【奈良県】

明日香村教育委員会1975『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』

明日香村教育委員会1980『奈良県高市郡明日香村越岩屋山古墳-史跡環境整備事業にともなう事前調査概要-』

明日香村教育委員会2013『牽牛子塚古墳発掘調査報告書-飛鳥の列り貫き式横口式石槨墳の調査-』

明日香村文化財調査報告書 第10集

笠野 毅1995『舒明天皇押坂陵の墳丘遺構』『書陵部紀要』第46号 宮内庁書陵部

河上邦彦編1999『東明神古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所

西光慎治・辰巳俊輔2009『王陵の地域史研究-飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅲ-』

『明日香村文化財調査研究紀要』第8号 明日香村教育委員会

西光慎治・辰巳俊輔2010『王陵の地域史研究-飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅳ-』

『明日香村文化財調査研究紀要』第9号 明日香村教育委員会

西光慎治・辰巳俊輔2011『王陵の地域史研究-飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅴ-』

『明日香村文化財調査研究紀要』第10号 明日香村教育委員会

末永雅雄・秋山日出男・網干善教・菅谷文則・藤井利章2013

『舒明天皇陵・天智天皇陵・天武持統天皇陵外形調査概報』『橿原考古学研究所論集』第十六 八木書店

奈良県教育委員会1982『飛鳥・磐余地域の後・終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告第39集

【兵庫県】

宝塚市教育委員会1985『中山荘園古墳発掘調査報告書』宝塚市文化財調査報告第19集

【広島県】

福山市教育委員会2008『尾市第1号古墳発掘調査報告書』

【鳥取県】

郡家町教育委員会1995『よみがえる古代のこおげ』

国府町教育委員会1995『史跡梶山古墳試掘調査概要』

《挿図出典》

第1図：福尾2013

第11図：寺社下1987

第21図：河上編1999

第2図：福尾2013

第12図：多摩市教委1996

第22図：陵墓調査室2009

第3図：明日香村教委2013

第13図：山梨県教委1985

第23図：末永1975

第4図：明日香村教委2013

第14図：三重県教委1990

第24図：寝屋川市教委1990

第5図：筆者作成

第15図：笠野1987

第25図：小川2009a

第6図：筆者作成

第16図：六勝寺研究会1973

第26図：宝塚市教委1985

第7図：吉岡町教委1996

第17図：小川2009a

第27図：福山市教委2008

第8図：志村1997

第18図：笠野1995

第28図：国府町教委1995

第9図：平野1986

第19図：西光他2011

第29図：郡家町教委1995

第10図：梅澤1997

第20図：西光他2010